使徒の働き 1:-28:

使徒行伝　榊原康夫師の構造分析　2017.7.30
(1998.10 の仕分)

1:-7: エルサレムのユダヤ人教会　キリスト教は神からのもの (5:39ガマリエル)
12使徒. 聖霊降臨.
ステパノ「エルサレム神殿の運命」　ヘリシヤ語ユダヤ人.

8:-12: ～アンテオケまで　キリスト教は異邦人にも
ピリポ (サマリヤ. エチオピア宦官)
サウルの洗礼. コルネリオの洗礼

13:-20: アンテオケ教会の宣教　異邦人教会の建設.
パウロ. バルナバ. シラス(シルワノ). テモテ
ガラテヤ地方 → マケドニヤ. アカヤ. アジア 伝道旅行

21:-28: パウロの証し　キリスト教こそ. イスラエルの希望.
エルサレム. カイサリヤ. ローマ

＊使徒. バルナバ (14:14) シルワノ(シラス). テモテ (1テサロニケ 2:6)

使徒行伝全体の構造を分析していますけれども、榊原康夫牧師の分析というものがインターネットに載っていました。使徒行伝、ルカ福音書のルカ文学に思い入れがあったようです。使徒行伝の全体構造を分析をして、他の先生のいろいろな分析はあるけれど、自分でもちゃんと確かめたいと、10回、20回、30回読みましたけど今はこんな感じですということで、4段落に分けていました。なかなか興味深いと思いましたので紹介しておきます。

最初の段落は、エルサレムの教会、ユダヤ人教会が作られるというところで、ガマリエルが出てきます。パリサイ人のパウロの先生、ガマリエルが「このまま放っておきなさい」と。「神から出たものなら壊すことはできないし、人から出たものならばなくなるでしょう」と言ったその「神から出たものなんだ」と。ユダヤ人の教会、エルサレムにできた教会は、神から出たもの、新しい神殿なんだということが最初の段落(1~7章)。

次は、その神から出たキリスト人の教会は、実はユダヤ人だけの教会ではなくて、異邦人、全世界に民が入れられる。異邦人にも開かれたキリスト人の教会の始まりなのです。これが2番目です(8~12章)。

そのアンテオケの教会は、あらゆる国々に行って教会を作っていますということです(3番目13~20章)。

最後に、パウロは、エルサレム、カイザリアで王たちの前で宣言するということなのですけど、そのキリスト人の教会というものは、実はモーセの律法、預言者にずっと言われていたように、本当のイスラエルの望みはこれなんです。(テキストには)「キリスト教こそ」と書いてあります。そのキリスト人の教会こそ、正統なイスラエルの相続人である。それがイスラエルが望んでいたものなんですよということをここで証言しているというように4番目で分析しています(21~28章)。

それをここにもう1回まとめてあります。新しい民が生まれました。新しい教会というものが生まれました(1~7章)。異邦人にも聖霊が与えられて、洗礼が与えられてアンテオケの教会が始まりました(8~12章)。そしてその教会が増えて広まっていきました(13~20章)。キリストが相続人であるその教会これが正当な相続人ですよ。約束されていた新しい民はこれです。全世界に広がっていきますということが宣言されるところで終わる(21~28章)というように見ているということですよね。これはもしかすると1、3、40、7の祭りの進み方にも似ているのかもしれません。

新しく生まれます(1)。生まれて聖霊が与えられて新しい教会です、全世界の教会ですというモデルとしてアンテオケの教会が始まります(3)。それでそのアンテオケの教会は戦って全世界に広まっていく、広めていく、あらゆる国々を弟子にしていく(40)。その働きによって「全世界が主のものである」という証が王のところで宣言される(7)。

パウロは9章でイエス様に「あなたは異邦人と王とイスラエルの民の前で証をするのです」と言われました。まずは異邦人のいる地域の教会で証をします。それで王の前で証をしますので、この後「それはイスラエルの民のためだった」ということは、ローマ人への手紙の中で書かれている通りです。まず異邦人、そして王の前でということは、パウロに与えられた働きが全うされているということも表していると思います。